The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	土橋九郎右衛門宛伊藤東涯書簡
Author(s)	
Citation	懐徳. 1987, 56, p. 97-99
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90685
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

土橋九郎右衛門宛伊藤東涯書簡

尚〻貴様にも其刻
大坂へ御見舞被成被成
先月廿七日之簡、此間
御難義之由、舞恙
三輪善蔵殿御来訪ニ付、
御帰被成、珍重存候
相達致拝見候、先以愈
先書に見合二条様
御堅固被成御勤候由、珍重
にも申遣候へ共
御事存候、此辺無相替事
此間者京都も
罷在候、然者日前令申候
風立、何と御覧
童子問下巻御返弁
人〻心静に無之
被成致落手候、委細被入
禁火之号令も厳
御念候御書面にて御座候
密ニ御座候
其刻御状ハ相遅申候故
重而之事ニ
書候茂の申遣と存候内
可仕候
延引罷成候、此度慥ニ請取
大坂表存候
申候、善蔵殿へも久〻に而
衆中も大方
致対談候、三宅・五井両丈

土橋九郎右衛門宛伊藤東涯書簡

土橋九郎右衛門宛伊藤東涯書簡

類火ニ逢被申候
其元逗留ニ付、日々御出合
とくと静り
可被成と可申候何も類焼
万々可得御意候
に御逢、ことに藤九郎殿
已上
只今喪居候由、被是
笑止千万之御事ニ御座候
尤先達而藤九郎殿ハ
書状進し候へ共、両丈とも
宜御意得被成候之間
期後音候　恐惶　拝
伊藤元蔵
閏月初四日　長胤（花押）
土橋九郎右衛門様
御報

本文書は、本年度になって、東京の古書肆より購入したものである。

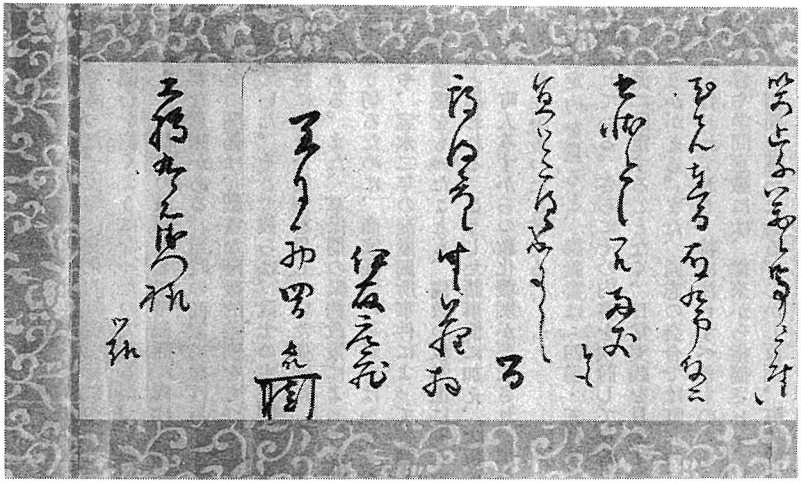
筆者である伊藤東涯は、京都堀川の古義堂をひらいた伊藤仁斎の長子で、名を長胤、字を元藤また源蔵といった。本書状の宛先は土橋九郎右衛門となっているが、これは摂津平野郷の含翠堂の創立者の一人である土橋宗信のことである。宗信は号を節斎といい、七名家に生れて、平野郷惣年寄を勤め、含翠堂の創設にあたっては、土橋七郎兵衛友直を助けて尽力し、友直が享保十二年に没した後は、堂の運営の中心となった人物である。宗信は仁斎・東涯の数えに親しみ、東涯との関係は深かったようである。東涯は享保十二年、同十八年に平野に遊び含翠堂で講義をおこなった。

本書状は、内容よりして、享保九年四月四日の状とみられる。三月二十一日に大坂市街の大半を焼いた妙知焼があり、三宅石庵・五井蘭洲らが焼け出されて、平野へ移ってきていた。とくに蘭洲五井藤九郎は病母を背負って避難したが、その甲斐もなく母を失っていた。この間の事情が本書状に記されている。石庵らが帰坂して、懐徳堂を創立するのが、この年の五月である。また二行めの部分には執斎三輪善蔵の来訪を伝えるなど、懐徳堂創立時の関係者の交友・消息を示す貴重な内容である。

本書状については、東涯自筆書状とみてよいか、若干

懸念をもったむきもあったが、文面に雑な訂正がなされているなどの問題はあるものの、内容は当事者でなければ記しえないものであり、ここに新史料として紹介する。

（脇田　修）



土橋九郎右衛門宛伊藤東涯書簡